



魔法使いの弟子 The Charwoman's Shadow (1926) ロード・ダンセイニ (荒俣宏訳) 早川書房 (文庫) (4/30刊・¥380)

ダンセイニの長篇第三作目、そして、既訳の「影の谷年代記」に続く、スペイン物の第二作にあたる。

スペインのとある城の領主は、衰えた家の権威を歎き、自分の息子ラモン・アロンソを魔法使いに弟子入りさせる。金を生み出す秘法、錬金術を学ばせるために。アロンソは、森の奥深く、魔法使いの館にようやく迎着くが、そこで影を失くした掃除女と出会うのだ。

ファンタジイ文庫に収められる作品には、童話風のお話が多い。内容の範囲も、本当の童話から、ニュー Yorker 風のモダン・ファンタジイまで、ホラーやゴシック小説などは、まず入ってこない。本書もまた、そんな作品だ。黒魔術を使う魔法使い、惚れ薬を求めぬ娘、欲を出した父親等、一癖ある人物がたくさん登場するのに、一人もワルはいない。しかし、ただ生温いだけの作品とは違う。原題にもある「影」(文字通りの影そのもの)の価値を主題に、破綻なく自然にまとめられている。そして、物語を愉しむだけでなく、また、その裏の寓意を読みとって満足できるなど、傑作の要素を併せ持っている。ダンセイニの技術は、さすがに見事である。(俊)